

# かさおか

発行所

天理教笠岡大教会

かさおか編集掛  
笠岡市用之江377  
郵便番号714-0066  
(0865)  
電話 66-1311  
FAX 66-1314



真府分教会  
大正14年4月18日 設立

立教189年11月23日(月)午前10時(9時受付)

天理教青年会笠岡分会

青年会長様御臨席総会

～親孝心を、生きる～



立教189年  
3月号

おつとめ・式典  
感話・抽選会(16時終了予定)

二月月次祭講話

人の育成・丹精は

いんねんの自覚から

世話人・板倉知幸先生

れた。

(講話の内容は次の通り)

▼丹精不足を改善する手立て

先月26日には滞りなく、教祖140年祭が勤め終えられました。この三年千日活動のうえにご尽力いただき、誠にご苦労様でした。

年祭は終わりましたが、新たなスタートが始まったわけで、陽気ぐらしの世界への道のりは、まだまだ先があり、遠いのです。

真柱様は、教祖140年祭の本部神殿でのごあいさつの中で、

年祭に向かったの、いわば非常時の歩みは終わりました。これからは普通の歩みになっていくわけですが、普段といっても、三年前に戻ってしまったのでは何にもなりません。三年間の努力のうえに立った歩みが続いていかなければならないと思います。

(みちのとも 189年3月号27頁とおおせられました)

私の思案の中では、せつかく心の成人を目指して通ってきたのだから、その精神の部分で歩みを確かなものにしていかなければならない。それぞれ心

定めもし、形のうえでは一旦区切りをつけるが、心の成人のうえで3年前に戻るのではなく、引き続き成人を続けていけるように努力するということだと思えます。

そう考えると、今回の年祭に打ち出した大教会の指針、「つなごろう、おやさまのお心に。つなげよう、信仰の喜びを。」は、引き続き実行していくべき事柄だと思えます。

私も心の中、そして自分の信仰のうえで、「教祖を身近に、ひながたを常に心に」ということを引き続き実行していきたいと思っている次第です。

さて、これからお道をどう歩んでいくか、次の塚へ向かっていくのに、何を重要課題として捉えていくかは、ただはつきりとお示しいただいていません。たくさんの課題がある中で、何か一つを取り上げるのは難しいのかもしれない。

これは私の思うところとしてお聞き取りいただければと思います。

まず、ここ十数年、御本部では条件付き無担任教会を整理されました。教会の理は末代、そして教会設立に関しては、人間の方から神様に願い出てお許し戴いたということが根本にありま

すが、お返しせざるを得ない理由があり、そのような結果になってしまったということですが。今後は教会をお返しすることは一切なく、丹精していかなければならないことです。

当時、年頭のごあいさつで、在籍者・直属教会長に対して、真柱様は次のようにおおせられました。

もともと教会というのは、自分たちのほうから願い出て許されたものであります。それぞれの願い出に対してお許しくださいました。そして、その理は末代であるということをお仰せされました。末代という年限からすると、古いところは130年余りの年限が経っています。が、それぐらいの年限といえども、親神様からご覧になれば「自分から願い出て、もう返すのか」ということになるでしょう。

これは、ひとえに丹精不足だと思えます。丹精不足というよりも、われわれが丹精できなくなってしまうたというように、考えなければならぬのではないかと思うのであります。

時代が変わり、周りの状況が変わっていくなかで、どのように丹

去る2月21日、教祖140年祭をうれしい心で迎えた直後の笠岡大教会二月月次祭に世話人・板倉知幸先生がご参拝ください、祭典に引き続き、年祭後の歩み方についてお話しくださいました。

先生は、まず、年祭時の真柱様のごあいさつを引用され、年祭後の歩み方について、引き続き「心の成人」を進める努力を促された。

続いて、近年の無担任教会の整理に触れ、「教会の丹精」を進める基本は「人の丹精・育成」であって、「育成・丹精」を進める前に、まずは、自らのいんねんを思索・自覚して、そのなかを喜び心を持って前へ進み、その勇んだ姿を道の後継者へ映していくことが肝心として、そのうえから、板倉家の入信から今日までの道程を述べられて、いんねんの自覚にいたる道筋をわかりやすくお話しください



いんねんの自覚を促される板倉先生

精するかということ、怠ってきたということではないかと思いません。

いくら布教したところで、丹精ができなければ何なりません。地道に丹精するということが、それは、いつに変わらずし続けなければならぬことであつたのですが、いつの間にか、それがおろそかになつてしまつたのではないかと思ひます。

成つてきたものは、もう元に戻すことはできません。今の姿の上で立つて、私たちには目指すところがありますので、そこへ向か

て歩んでいかなければなりません。

明治20年、教会本部の設置を望んで、私たちの先人が教祖に対して「いかようにも親神様の仰せ通り致します」(『稿本天理教教祖伝』第十章「扉ひらいて」)と心定めをされた。その心定めは、今も生きていふということに刻んで、しっかりとそれぞれつとめを果たせるように、努力をしていくことが大切であろうと思ひます。

(みちのとも 184年2月号7頁)  
これは在籍者・直属教会長や主だつた者に対してのお言葉ではありませんが、教会として信者さんの関係やおたすけということを考えて、丹精ということは一一人ひとりが気にかけていかなければならないのではないかと思ひます。

また、諭達では、

教祖お一人から始まつたこの道を、先人はひながたを心の頼りとして懸命に通ひ、私たちへとつないで下さつた。その信仰を受け継ぎ、親から子、子から孫へと引き継いでいく一歩一歩の積み重ねが、末代へと続く道となるのであ

る。(諭達第四号)

これは先ほどの「教会の丹精」ということとバラバラのことではなく、道を伝えていくことによって信仰が伝わり、その信仰を育み続ける拠り所が、言へば教会であり、信仰が伝わっていけば教会も引き続き成つてくるということ。

信仰者が寄り集つて教会となつてきたわけで、子や孫に信仰を伝えて丹精すること、教会が賑やかに、人々の心の成人も進んでいくのです。布教をして人をおたすけすることも

さることながら、周りにいる身内に道を伝えていくことも立派な布教であり、おたすけであると思ひます。

しかし、現実にはなかなか難しいところも理解できます。世間一般の考え方が中心になつていふところに、お道の教えを説き聞かせても響かないということがあつてもいいと思ひます。

また、自分自身が勇んで通れていないのに、人に「勇め」と言つても到底理解はしてもらえません。自らが勇んで、そしてなるほどの人になつてこそ、道は伝わっていくのだと思ひます。今は医療も進み、おさづけに頼るよ

りすぐ医者に掛かるといふ傾向はないでしょうか。信仰に頼らなくても物事は解決するといふ傾向にないでしょうか。

親神様・教祖の存在が分からなければ、他に頼るのが自然ですが、私たちは信仰者なので、物事が成つてくるその根本には親神様・教祖の存在があり、教えの根本があります。ここを伝えていかなければ、世間に流れてしまふのは当然であり、信仰せずとも物事は自分で解決できると考えるでしょう。

目に見えない何かがあることに気づけるように教えてあげなければ、信仰は理解できないのではないのでしょうか。

また、信仰を伝えていくうえで大切な要素として、私は、いんねんの自覚ということが大きな元だと思ひます。自分にはどのようないんねんがあるのか、また何が原因で信仰することになつたのか。そして代を重ねてどのように変わつてきているのかを理解することだと思ひます。

▼初代・槌三郎の信仰

ここで、私事ですが、私の家の話を

したいと思います。私の家の信仰の初代は私の曾祖父になりますが、入信の動機が「教えに感銘して」ということでした。兄の目の身上から初めておちびに帰りました。当時、東大阪の恩智というところなので奈良からすぐ近くで、天理に生神様が居られるという噂が流れてたどり着いたのでしよう。そしてある先生のお話を聞いて感銘し、道につながりました。何回かおちびに運ぶうちに、自分も合間を見ては、にをいかけ・おたすけに出るようになり、「お屋敷の草引きでも」という思いから、たびたびおちびに帰り、月の半分はおちびで過ごすようになり、最終的におちびへ移り住みました。

初代は8人の子供を授かりました。長男を本家へ養子に出し、その後息子の7男である私の祖父が後を継ぎました。ですから、信仰を始めてすぐ家の元々が良くなってきたのかという、兄は信仰に反対して目には助からないし、信仰しているのに子供をどんどん亡くしていくわけです。

初代の4男は体も丈夫で、成績優秀、スポーツもできて、大学も出て、期待の後継者だったそうです。大学卒業後

の9月より本部でお仕込みいただくことも決まり、教服もあつらえて天理教校別科の講師が内定していて、さあこれからのというときの8月、高熱にうなされ、介護のいかにもなく翌月、25歳で出直しました。そのとき、初代は63歳、信仰を始めて46年目、残ったのは唯一のおちびで生まれ育った15歳の祖父だけでした。このときばかりは、17歳から信仰について、大変な苦勞のなかを通ってきた初代にとつてショックが大きく、何人も慰めやお悔やみのあいさつに来られるのにはなんとか答えていたようですが、当時まだ35・6歳の高知大教会2代会長・島村國治郎先生が来られたときは、火鉢を隔てて、物も言わず、あおむけに寝転んでしまったそうです。そのとき島村先生が、「私は今日まで、何もかも先生を頼りにして通ってきました。先生のおっしゃってくださることは、何でも神様のお言葉だと思つてつとめてきました。それにいま、なるほど頼りにする息子さんに出直されたことは、実にお気の毒ですが、このことでこんなに力を落とすなされる先生とは思いませんでした。私の眼鏡違いました。先生は、教祖のおひながたを説く資格はございません

ね」と、こう言われたのです。

26歳も年の差がある若い島村先生が、大先輩に向かつて物を申すのですからどのような感じだったでしょう。しかし、いままで天井を眺めて寝転んでいた初代はパツと起き上がり、島村先生の膝の前に端座して、両手でしっかりと島村先生の手を握り、涙を流して、「よう言うてくれた。俺が間違っていた。誰も彼も悔やみに来ては、お気の毒や可哀想やと言うてくれる奴ばかりだったが、しかし、よう言うてくれた。全く教祖は、頼りにするお子さんには皆先立たれ、後にはたった1人の孫さんしか残られなかったが、それでも心を倒さずお通りくださいました。これがひながたであった。わしも思い違いしていたわ」と言つて、島村先生と一杯酌み交わしたそうです。

初代は、教祖が現身うつしみをかくされた明治20年以降も、内務省訓令や一派独立などの多くの節のなかを、よく信仰を諦めず通つたなと思ひます。逸話篇に、本部神殿で、当番を勤めながら井筒貞彦が、板倉槌三郎に尋ねた。「先生は、何遍も警察などに御苦勞なされて、その中、ようまあ、信仰をお続けになりましたね。」

と、言うと、板倉槌三郎は、「わたしは、お屋敷へ三遍目に帰つて来た時、三人の巡査が来よつて、丹波市分署の豚箱へ入れられた。あの時、他の人と一晩中、お道を離れようか、と相談したが、しかし、もう一回教祖にお会いしてからにしようと思つて、お屋敷へもどつて来た。すると、教祖が、

『ゆうべは、御苦勞やったなあ。』と、しみじみと、且つニコヤカに仰せ下された。わしは、その御一言で、これからはもう、かえつて、何遍でも苦勞しよう、という気になつてしもうた。」と、答えた。(逸話篇56)

とあります。

初代の信仰の元一日であり、教祖の末を見据えてのお言葉であり、お導きでした。

### ▼いんねんの自覚の大切さ

そして、7男だった私の祖父は28歳で家を継ぎました。しかし、奥さんが長女を生んですぐ出直し、続いて2人目の奥さん、この方は最初の奥さんの妹ですが、長男・次男を産んでまた出直し、3人目の奥さんは、子供を2人

亡くすという大きな節を頂きました。ですから私の父は、実の母親を8歳のときに亡くしています。板倉の家には「親子の縁が薄い」といういんねんがあると、つくづく思います。

そして3代目が、私の父です。父もすでに20年前に67歳で出直しています。大きな節のなかを通りました。

昭和54年のこと、父の顔色が悪いので、当時の真柱様、3代真柱様とまさ奥様が、大変ご心配くださり、一度病院で診てもらおうようにとお声を頂いたので、病院で検査すると、血圧が非常に高く、心臓が肥大、腎臓の機能が著しく低下していて、「このままでいけば、あと1ヶ月の命」と言われました。父は41歳、私は中学校2年生で13歳のときでした。

父は入院することになり、毎日祖父からおさづけのお取次ぎを頂いて、1ヶ月の命が2ヶ月半で退院できました。しかし絶対安静をいわれ、静養するなかに、その年の暮れには、頼りの祖父が心筋梗塞で出直しました。翌年には、ついに父も透析を受けることになり、当初は体が慣れるまで大変で、透析の後は家でずっと寝ているということが常でした。本人にとつたら、い

ままで元気に御用に走り回っていたのに自由がきかなくなつたのですからで、深く思案を募らせたことでしょう。当時は透析をすると5年、もって10年といわれた時代でしたが、最終的に26年間、透析を続けながらも命長らえて、御用にお使いいただきました。

そして、4代目が私です。39歳で家の後を継いだわけですが、私も大きな身上をいただきました。

平成23年、ちょうど東日本大震災が起こつた年です。災救援の御用で4月26日祭典終了後に出発、福島で1泊したときから熱が始め、風邪かなという症状でした。普段ならみんなと一杯呑んで寝るところですが、しんどかつたので先に寝ました。翌27日、岩手に入つてからも熱は出る喉は腫れるので、本当に動けなくなり水も飲めない状況になりました。

実は4月の初めに、右腕の内側に内出血のあざができ、2・3日で消えましたが、また左腕に内出血のあざができました。岩手でお風呂に入ったときには、太ももに薄緑の内出血ができていました。

そのような状態で動けなくなつたので、翌4月30日朝、状況を災救援本部

に相談した結果、帰りの飛行機の切符を手配するとのことで、一日の飛行機が取れました。当時、震災で、飛行機の切符がなかなか取れず、満席で、キャンセル待ちして1日の切符が取れましたが、それでは遅いと当時の本部長がもういっぺん事務局を突いて、たま、30日の飛行機が取れ、戻ってきました。

おぢばに戻つて「憩の家」の救急に行くと、私以外は誰も患者がおらず、すぐに診てもらえました。これまでの経緯を説明し、内出血のあざについても説明をして診察を受け、血液検査を受けることになりました。点滴を受けながらベッドで横たわつて、結果を待つっていると、カーテン越しに電話が鳴り、先ほどの担当医が「はい、分かりました。白血病ですね」と言いました。

実は岩手にいるときに、ネットで「内出血、あざ」と検索すると「白血病」と出てくるので、冗談で周りの人に「僕、もしかしたら白血病かもしれません」と言っていたので、電話で「白血病」と聞いて、「あ、自分が白血病や」と思いました。診察を受けたのも私、血液検査したのも私1人という状

況から考えても、もう自分が白血病だと分かりました。でも、それを聞いて、まだ45歳でしたが、「俺はこれで死ぬのかな」と思いました。私の頭の中では、白血病イコール血液のがんで亡くなるという理解です。昔、山口百恵さんの番組で「赤いシリーズ／赤い疑惑」というのがありましたが、山口百恵さんが高校生で白血病になって、亡くなるというドラマでした。それを見ていたので、私も白血病と言われたときは亡くなると思つたのです。

私のベッドを挟んで担当医と妻の会話が始まりました。「子供さん何人おられますか」／「5人です」、「一番上は、おいくつですか」／「中学校2年生、13歳です」。そのとき私ははつとして、神様が仰せくださつてるのはこれかと思いました。

私の父が病気になるたとき、私は中学校2年生の13歳でしたが、今回、自分が身上になって、私の長男が「中学校2年生の13歳」と聞いたたときに、「あ、このことか。いんねんの自覚つてことだ」と、これを神様から言われたと思いました。

父はよく、「いんねんの自覚は大切だ」と言っていました。私は頭の中

で理解していたものの、心の底から分かってはいませんでした。このとき、本当に親様からこのいんねんの自覚の大切さを教わった瞬間でした。あとから聞いた話ですが、救急で「憩の家」へ行ったとき、救急の担当医がたまたま血液内科の医者だったこと。血液検査の検査技師が5時を過ぎていたのに残っていたこと。喉を診てもらった担当医が、連絡を受けてすぐ駆けつけたこと。キャンセル待ちの飛行機がすぐにとれたこと、「憩の家」の救急には私以外の患者は誰もいなかったことなど、偶然が重なって、万全の態勢で私を待ち受けていただいたような感を受けます。

入院中は真柱様ご夫妻、前真柱様、そのほか多くの方々のお見舞い、おさづけのお取り次ぎを頂いて、半年間の抗がん剤治療、そして2年間の継続治療が進み、現在はここまで元気になりました。

治療を受けているときに、担当医が私の白血病のタイプを調べてくれました。白血病の種類は大きく分けて8つぐらいに分かれ、そのなかでもまだ分かれていません。その結果を持ってきた医者が「板倉さん良かったですね。こ

のタイプは20年前だと、もう、ダメでしたが、薬の改良が進んで、今は1番助かりやすい治療しやすい白血病なんです。」と言われました。その通り、抗がん剤治療は4回して、半年は入院を繰り返して、その後2年間は飲み薬だけでなのです。その飲み薬ができたことで治癒のパーセンテージがバツと上がったということでした。

初代は子供を7人、自分より先に見送りました。2代は奥さんを2人、そして子供を2人亡くしました。父は自らの身上でしたが、奥さんや子供を亡くすことはありませんでした。私は白血病を患いましたが、父のように週に3回透析をするということもありません。半年に1度の血液検査だけで済ませてもらっています。信仰によっていんねんもだんだんと良い方へ導かれているように思います。

自分の心のほりから身上を頂くこともありますが、このように4代続いたことよって本当に結構な姿をお見せいただき、親々の徳で、ここまでお連れ通りいただいています。続かなければ見えてこないことも、4代続いたからこそ味わうことができていると思います。

### ▼家の信仰の元一日を説く

逸話篇に、

明治十四年頃、山沢為造が、教祖のお側へ寄せて頂いた時のお話に、

「神様はなぬ、『親にいんねんつけて、子の出て来るのを、神が待ち受けている。』と、仰っしゃりますね。それで、一代より二代、二代より三代と理が深くなるね。理が深くなつて、末代の理になるのや。人々の心の理によって、一代の者もあれば、二代三代の者もある。又、末代の者もある。理が続いて、悪いんねんの者でも白いんねんになるね。」

と、かようなお言葉ぶりで、お聞かせ下さいました (逸話篇 90) とあります。

これは、親神様は1人の人を道へ引き寄せるのに、単にその人だけを引き寄せるのではなく、いづれその人の子や孫になる者までも見通して引き寄せられ、その者たちすべてが未来のよぶくとなることを待ち望んでおられる。そして、1代より2代、2代より

3代と途切れずに代を重ねて歩み続けることで、だんだんと理が深くなつて、そうして初めていんねんも納消されて、結構な姿にご守護いただくというように、人間が本當にたすかかっていく道筋を分かりやすくお示しく下さっている逸話です。

この話を聞かれた当時の山澤為造先生はじめ、ほかの先生方は、教祖がそうおっしゃるからそうなるのだろうな、というぐらいの気持ちだったと想像します。なぜなら当時は、ほとんどの方が初代で、代を重ねた信仰はまだ想像もつかなかったのではないでしょう。しかし、いまは代を重ねた信仰の4代・5代・6代という家があり、なるほど、教祖のおっしゃったことが本當に現れてきていると納得できるのです。

家の信仰の元一日・いんねんをしつかりと説いて、いんねんの自覚をする。これを怠っているのは道が途切れてしまっています。「いんねんの自覚」ということを伝えていくことは、道を次代へ伝えるうえで欠かせないと思います。

『天理教の教典』には、

およそ、いかなる種子も、まいてすぐ芽生えるものではない。い

婦人会笠岡支部(上原愛美支部長)は、2月28日、「ホットテラス」トライアングルトーク」を大教会で開催した。

20代から50代の女性、13人が参加した。午前中は「トライアングルトーク」と題して、3つのテーブルを3グループに分かれてローテーションし、それぞれ話を聞いたり、セッションを行った。じっくり話に耳を傾け、和やかに

## ホットテラス

婦人会

いんねんも、一代の通り来りの理を見せられることもあれば、過去幾代の心の理を見せられることもある。己一代の通り来りによるいんねんならば、静かに思い返せば、思案もつく。前生いんねんは、先ず自分の過去を眺め、更には先祖を振り返り、心にあたるところを尋ねて行くならば、自分のいんねんを悟ることが出来る。これがいんねんの自覚である。(教典7章)とあります。

別席のお話の最後の方に、



トライアングルトーク

楽しい意義ある時間を過ごした。午後は昼食、フリーマーケット。参加者や婦人会スタッフが持ち寄った小



楽しい食事時間

物やスイーツ、ネイルやマッサージの施術など、それぞれに心満たされる時間を過ごし、笑顔溢れる一日となった。



大教会長様もお子様連れで

参加者らは、心がホッとするひとときを送った。(担当者 上原宏恵)

天の理というものは、年限の中から出来てくるのが天の理という。天の道筋通るから前生この世のほこりがぬけて、病の根は切れ、身も自然に達者になって長く楽しんで暮らして頂けるのであります。(編者録取)

とあり、最後に、

尽くした理は一代の理ではありません。末代の理であります。身は選しても心は末代の理でありますから、親神様は受け取っております。親が子となり、子が親と

(編者録取)

なりて、家は末代続く理でありますから、不時や災難もなく家はますます栄え、不自由なきように暮らさしてくださいませ。(編者録取)

まずは自らのいんねんを思案して、そしてそのなかを、喜び心を持って前へ進み、その態度をわが子や若い方々へ映していくことを実行したいものです。

(編者録取)

「いんねんの自覚」ということを教会やよぶく家庭での信仰の伝授、そして人の丹精・育成のうえで、一つの

(整文 岡崎真一)

大きな課題として取り上げていただいて、伝えていく手だてを講じていただきたいと思う次第です。

年祭が終わって一息つくというときではありますが、信仰を伝えていくことには、休み時間はありません。本当に色んな方々にそういう思いを伝えて、教会や家庭をしっかりと信仰につなげ、盛り上げていっていただくことをお願いして、私のお話といたします。ありがとうございます。

### 第3回「伏せ込みひのきしん」実施

青年会



青年会(瀬藤大喜委員長)は、3月1日第3回目となる、青年会長様御臨席総会に向けての、伏せ込みひのきしん



を実施。管理部の先生方指導のもと、神殿外の窓拭きをさせていただきました！  
汚れを落とすたびに、自分たちの心の汚れも綺麗にできていただき、より一層心を澄ますことができました！  
(委員 山野大地)

(管理部 + 青年会) × 伏せ込みひのきしん = ○心を澄ます毎日を。

### 直轄委員部長・委員研修会開催 婦人会



本年の活動について話す支部長

3月3日婦人会笠岡支部(上原愛美支部長)は、「直轄委員部長・委員研修会」を開催しました。  
まず、支部長様を芯におつとめを勤めさせていただき、続いて支部長様より「今年1年の婦人会の活動について」お話がありました。  
次に本会よりかぐらつとめを学ぶようにお示しいただいている上から、前支部長様より「おつとめについて」お



「おつとめ」をテーマに話す前支部長

話を聴かせていただきました。  
昼食後、支部長様、前支部長様のお話を聴いてのねりあいがあり、それぞれに心に残ったこと、感じたことを語り合いました。  
最後に岡崎豊子常任委員が「さとし合ひ、助け合ひの明るい婦人会を目指して通らせていただきます」と終わりの挨拶をして閉会となりました。  
新しい歩みが、始まりました。  
教祖の望まれる「陽気ぐらし」という最終目標。  
先長い道中ですが、勇ませ合って、声かけ合って、励まし合って、助け合っ



さとし合い・助け合いの明るい婦人会



「おつとめ」について学ぶ参加者

て歩ませて頂きたいと思っています。  
(常任委員 武内正美)



おちばに向かってよろづよ八首

海外部(上原志郎部長)は、3月8日、今年1回目の広島平和公園にいがけに、部員2人、大人3人、高校生1人、子供3人の計9人で行かせて頂きました。  
公園内でのよろづよ八首のおてふり後、約1時間全員で外国からの観光客に声を掛け、12ヶ国、35グループに話しながらパンフレットを手渡し、世界だすけの一端を担わせて頂きました。

**広島平和公園**  
**外国語パンフレットにいがけ**  
**海外部**



切り込み隊長の活躍

吸江分教会 西村 由理子  
この度初めて、海外部の皆さんと広島平和公園で、にいがけをさせて頂きました。  
最初は「おどおどしていましたが、一切込隊長行つて下さい！」とはつばをかけられ、車中で覚えた<sup>ななご</sup>辿々しい英語で声を掛けました。そして、わからなくなると即志郎先生へバトンタッチ(笑) 一生懸命で何組の方達とお話しました

とても楽しい時間を過ごしました。  
(部長 上原志郎)



平和公園にて

か覚えていませんが、ほとんどの方がフレンドリーに話して下さい、パンフレットも快く受け取って下さいました。  
この日は気温10度未満の肌寒い中でしたが、NO MORE WAR(外国からの広島平和公園に来た観光客は皆さん一様に戦争はすべきでないという考えをもっていった)の声もいっぱい聞けて、心はポカポカ温かく晴れ晴れとしたにいがけとなりました。  
また次回、日程が合えば参加したいと思えます。  
皆さんお世話になりました。

# 二月月次祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます  
親神天理王命の御前に 会長上原明勇 慎んで申し上げます

親神様には子供かわいいい一条の親心から 十全の守護をもって一列子供を  
お守り下されているばかりではなく 時旬に応じての仕込みを通して陽気ぐ  
らしへとお導き下さっております事は誠に有り難く勿体ない極みでございま  
す

私共は日々朝夕に御礼申し上げつつ 世界いちれつたすけたいとの思召に  
お応えするべく たすけ一条の御用の上に努め励ませて頂いております

その中にも今日の吉日は この教会にお許し下された二月の月次祭を執  
り行う日柄でございますので 只今からおつとめ奉仕人一同明るく陽気に勇  
んで座りづとめてをどりをつとめさせて頂きます 御前には今日の日を樂し  
みに寄り集いました道の子供たちが 相共にお歌を唱和し 日頃のご厚恩に改  
めて御礼申し上げる状をご覧下さいまして 親神様にもお勇み下さいますよ  
うお願い申し上げます

さて先月二十六日は国の内外から寄り集いました大勢の帰参者のもと教祖  
百四十年祭が執り行われました 年祭に向かつて三年千日と仕切つての成人  
の歩みをつとめ切ることができた喜びと感謝を御存命の教祖に御礼申し上げ  
ると共に 次の塚へ向かつての新たな成人の歩みを誓わせて頂きました 年  
祭までの歩みが更なる成人の歩みにつながるよう努め励ませて頂く所存でござ  
います

また本日は世話人板倉知幸先生にお越し頂いております 年祭をつとめ終  
えたこの時旬のお話を 次の塚へ向かつての歩みの指針として しつかりと胸  
に治めさせて頂きたいと存じます

何卒親神様には 陽気ぐらしをさせてやりたいとの親心にお応えしたいと  
たすけ一条に邁進する皆の誠真実の心をお受け取り下さいます 万たすけ  
の上に尚も自由のご守護を賜り お望み下さる陽気ぐらしの世の状が一日も  
早く実現しますようお導きの程を 一同と共に慎んでお願い申し上げます

## 立教百八十九年 二月月次祭 祭典役割表

祭主		扈者		講話		区分		役割																
大教会長様	岡崎真一	浅野明教	板倉知幸先生	座りづとめ	前半	後半	おつとめ	てをどり	笛															
内海史郎	岡崎治喜	門脇元教	山田敏教	門脇元教	門脇元教	岡崎真一	田中隆之	中村義太郎	高木昭祥	大教会長様	前会長様	上原繁道	前奥様	大教会奥様	上原順子	吉岡誠一郎	佐藤道孝	内海史郎	中村剛	吉岡壽	上原志郎	谷内美知子	田中つかさ	上原千枝子
贊者	指図方	四月講話	座りづとめ	前半	後半	おつとめ	てをどり	笛	拍子木	太鼓	すりがね	小鼓	琴	三味線	胡弓									
内海史郎	岡崎治喜	門脇元教	山田敏教	門脇元教	岡崎真一	上原浩	中村剛	中村剛	今川昌彦	森本忠善	武内正美	横山小智榮	室悦子	浅野明教	赤木素志	中村剛	岡田誠	田中隆之	上原繁次	佐藤真孝	高木昭祥	高木孝子	室悦子	山野なつ

## 立教189年 定期巡教表

教会名	巡教月日	巡教員	教会名	巡教月日	巡教員	教会名	巡教月日	巡教員
廣 町	2月13日	虫明立生	恵 陽	3月14日	横山逸郎	天場山	3月 8日	吉岡誠一郎
福 廣	2月 7日	今川昌彦	御 野	2月 8日	大教会長様	簸ノ川	3月10日	吉岡誠一郎
福 勇	2月11日	森本忠善	香地華	2月 9日	山野弘実	多古浦	3月13日	大教会長様
福 芦	2月 9日	武内正美	真 金	2月11日	山野弘実	雲 東	2月11日	今川昌彦
福 満	2月 8日	森本忠善	稻 倉	2月13日	上原繁道	大江橋	3月 5日	上原志郎
福 岩	2月12日	大教会長様	稻 瀬	2月 5日	門脇元教	品 治	3月 7日	虫明立生
西 村	2月10日	中島誠治	稻 讃	3月10日	横山逸郎	鶴 眞	3月10日	田中隆之
福 年	3月 7日	大教会長様	門司港	2月12日	田中隆之	川島郷	2月10日	大教会長様
引 野	2月 6日	上原繁道	大恵山	2月12日	上原繁道	作 備	2月 6日	門脇元教
福 昭	2月11日	吉岡誠一郎	東水島	2月10日	浅野明教	錦ヶ原	3月 3日	中島誠治
福富士	2月10日	山野弘実	高児島	3月 5日	中島誠治	眞 府	2月 9日	浅野明教
福 東	2月 9日	上原繁道	高 丸	3月 6日	岡崎真一	吉 舎	3月 4日	浅野明教
東福山	2月 6日	武内正美	出 雲	3月11日	大教会長様	上小畠	2月10日	田中隆之
福 南	2月13日	岡崎真一	瑞 雲	3月 6日	田林久嗣	木津和	2月 6日	今川昌彦
福 節	4月 8日	今川昌彦	米 府	2月15日	上原志郎	國 須	2月 7日	門脇元教
福 輝	3月13日	上原志郎	弓ヶ濱	3月 8日	上原繁道	上吉野	2月12日	前会長様
坪 生	2月 5日	今川昌彦	西 伯	3月 9日	吉岡誠一郎	上 備	2月 8日	横山逸郎
芦 品	2月13日	大教会長様	米 美	3月 5日	田林久嗣	河 佐	2月 4日	田中隆之
安 那	3月 8日	大教会長様	照 雲	3月 6日	上原繁道	上川邊	3月12日	上原志郎
芦田川	2月 3日	虫明立生	松 都	3月 7日	上原繁道	甲 井	3月 3日	浅野明教
三 郡	2月10日	森本忠善	樺 島	月 3日	門脇元教	上 父	3月 7日	岡崎真一
芦 常	3月 5日	岡崎真一	新輝豊	3月 3日	大教会長様	神 驛	2月 5日	武内正美
芦加茂	3月 6日	大教会長様	亀田山	3月12日	大教会長様	葦 沼	2月 7日	山野弘実

# 大教会だより

## 辞令

立教189年2月21日付

## 登用

雅楽奉仕人 渡邊裕也

## 教会指令

## 任命願

神驛 分教会

\*前任 渡邊孝信

\*新任 渡邊裕也



渡邊裕也氏

☆奉告祭 立教189年5月4日

立教189年2月26日承認

# 計報

## 北川美子さん

稲倉分教会二代会長夫人

元天理憩の家病院事情部講師

3月15日出直されました。  
享年 95才



私事ですが、昨年夏ごろ、体調に違和感を感じ、暑さによる夏バテかな？と思いつつ日を過ごしていましたが、一度病院で診察してもらったら？と勧められ受診しました。

その結果、検査入院して良く調べてもらってください。との事でした。一度はこれほど自分なりに覚悟を決めて入院しましたが、幸いにも結果は悪いものではなく家族もホッとしました。お陰様で、今年1月26日には教祖140年祭に元気で参拝させて頂くことが出来ました。

しかし、来年には古稀を迎える年、唐の詩人、杜甫の詩に『人生七十古来稀なり』と言う一節がありますが、古稀だけに身体もあちこちコキ、コキ言いつつ何があっても不思議でない年になったな！とも思いますが、そんなことは言えませんよね。

と言うのも、昨年6月26日に会長の御命を戴いてから早4度目の登殿参拝、これが最後の登殿参拝かな？10年後はわからないな？と思いつつながら北礼拝場の東の端最前列で目を閉じて参拝させて頂いた時、フツと目を開けて横を見れば、きょうだい教会の会長様方、すぐ横には私より10歳年上、その横には20歳年上の会長様方が元気に参拝しておられ、凄いなあと思いつつ参拝を終えて詰所から迎えに来て下さったバスに乗る時、親しくしてもらっている年上の会長様から教祖150年祭にも2人とも元気で参拝させてもらおうな！と声を掛けてもらいました。：なんと皆さん元気なこと！と思いました。

連続テレビ小説「ばけげん」の【♪日に日に世界が悪くなる、気のせいかな？】ではないですが、世界中の至るところで紛争が起き、目を覆いたくなる様な蛮行・虐殺が繰り返されている今日、私達に出来ることは、治まりを願い、祈ることくらいしかありませんが、お教えいただいた「おつとめ」を日々重ねて勤めることで神様のお働きを願わなければならないと思うと、さて、諸先輩方を見習ってもうひと踏ん

張り？ いやいや終活も併せてしなければと思う今日この頃です (KT)

## 詰所からのお願い

### 詰所での宿泊・喫食について

- ・詰所で宿泊・喫食される場合は、「教会名・代表者名・泊数・食数」を、2日前までには、必ず詰所へご連絡ください。
- ・食事をしない（宿泊のみの）場合でも、2日前には申し込みをして下さるようお願い致します。